

び ぶ り お



VOL. 14 NO. 2 The University of the Ryukyus Library Bulletin 1981.4.30

R I H E 雑考

玉 城 嗣 久

R I H Eとは大学教育研究センターの略称である。この研究施設の存在は、教育研究者以外にはあまり知られていないようである。1972年5月国立学校設置法施行規則の改正によって創設されたのだから、その歴史もきわめて浅い。広島大学の本部図書館の四階にあるこのR I H Eは、所長(併任)、専任の教授2人、助教授2人、助手3人、事務官若干人からなっているが、専任のほかに、広島大学以外の大学や研究所から20人程度の客員研究員が併任されている。この施設は、大学における教育方法、教育内容等専ら大学に関する研究を行うために設けられたといわれている。私もその客員研究員に併任されてから2年目になるが、最初の頃は、なぜ大学教育がこれほどのスタッフと研究員によって研究される必要があるのだろうかと迷ったことを覚えている。私に与えられたテーマは、日本占領期の大学教育、特に南西諸島における戦後の高等教育の歩みを調べることであった。幸にして、自分の日頃の研究関心と所与のテーマが一致していたので、すぐ研究員を引きうけたのであったが、全国から集まる研究員と討議しているうちに、大学における Teaching の改善に関する新たな困難な問題に研究話題は変って行った。大学とは何だろうか、大学教育とは何だろうか、雲をつかむような話題が長い間続いた。客員研究員は夏休みなどの休暇を利用して長期滞在し、所与のテーマを調べると同時に研究発表も行ない、また年1、2回全客員研究員が集まって大学教育を集中的に討議する機会も与えられている。

大学は、いうまでもなく「研究と教育」の場である。このごくあたりまえのことが教育関係学会で討議されたり、雑誌の特集になったりする。大学への進学率がやがて40%にも達しようとしている日本では、アメリカと同じく大学の大衆化が確実に進んでおり、その結果、20年前や30年前には考えてもみなかった新たな問題、すなわち大学における教育方法や内容の問題がクローズアップされてきた。学問体系に依拠した講義内容や新しい学説などを、どのようにして多くの学生たちにわかりやすく解説するか、学生たちがむつかしい学説に興味を持って理解するにはどのような方法が必要なのか、など大学教師も中等教育、初等教育の教師たちと同じく、学習のメトードにいやおうなしに関心を示さずにはいられなくなってきた。大学における教育は、研究の延長であるとか、研究即教育と考える人々もいるだろう。たしかに大学院であるとか、あるいはある分野の科学領域にはそのことはあてはまるであろう。

大学における研究体制というか研究整備条件はどうであろうか。自然科学の場合、研究者たちは巨大な科学実験装置を操作し、その機械を相手に研究実験する。巨大な装置は人間を疲労させ、研究は頭脳労働と肉体労働に頼ることになる。そこに要求される条件は、学者としての力量のほかに長く、根気のいる実験研究にたえうる体力である。またこの巨大な科学装置は多額の維持費と研究費を要し、大学の研究費だけではとても間にあわないのが現状であろう。人文・社会科学に従事する研究者たちは、体力に関しては自然科学者ほど条件にはならない。しかし大学の彼らは、年間ほんのわずかの研究費で図書や資料を収集し、過去の先行研究を読破して、その上に新しい何かを体系づけなければならない。そこには長年の「蓄積」が必要になる。これら人文・社会科学者は、大学と自宅が研究の上で連続していて、図書や資料をたずさえて大学と自宅を往復する。しかしよく考えてみると、大学のこれら研究者の「研究」は、いったい何のためにあるのだろうか。学問真理の発見のためとか、自らの学説の樹立であるとかいってみても、研究費支出者、すなわち納税者国民がほんとに真げんにそう要請しているのかどうか、考えれば考えるほどそうではないような気がする。こんなことを口走ったらどこかで誰かに怒られるかも知れないが、大学における「研究」は、実は、「学生の教育」のために必要な研究、すなわち教材製作、資料作製、などの費用なのである。少なくとも、研究費の額から推察する限り、そう考えるよりほかに道はない。大学生にいかにして難解な学説を平易に説明し、理解させるか、学生の講義や演習などに対する積極的なモチベーションを造出する工夫が大学教育に少なかったような気がする。20年前、30年前、戦前の大学の学生にはその必要はなかったのかも知れない。なぜなら、彼らは学問へあこがれて大学へ来たのであったし、教官の深い学説を吸収しようと思って入学した者がほとんどであったから。しかし今日はそうではない。ごくひとにぎりの学生を除いた多くの学生は、大学での「教育」を期待し、「職業への準備」を望んでいるのだと思われる。学歴社会になればなるほど、大学普及が進めば進むほどそのような傾向は著しくなるだろう。大学における教育方法 (Teaching) の研究が、今さかんになろうとしている理由がわかるような気がする。今のところ、RIHEは広島大学だけに設置されているが、今日のかかる時代の要請からすれば、ほかの大学にも設けられるかも知れない。

大学の機能は三つある。一つは研究、二つは教育、三つ目は Public Service であるといわれている。しかしこの第三番目の大学機能は、日本では未だ十分なされてはいない。欧米の大学は古くからこの機能を果たしてきた。特にイギリスの大学、アメリカの大学でその傾向は著しかった。今日、日本の大学で生涯学習の一環としての大学拡張プログラム (Univ. Extension) を実施したり、施設として大学開放センターを有しているのは、東北大学、金沢大学、香川大学、大阪大学、あるいは現職教員教育にサービスしている筑波大学、埼玉大学、兵庫教育大学、慶応大学、図書館情報大学、立教大学など数えるほどしかない。本学も、1972年以前は上記諸大学をはるかに上まわるほどの Public Service プログラムを行っていたことは記憶に新しい。

さて、以上のように考えると、大学とは教育の場であり、Public Service 研究の場であるが、研究とはいっても教育のためになされる研究であることがわかる。しかし、よく考えてみるとわれわれの周囲には、直接教育のためとも思われぬような、深く専門化された小さなテーマに日夜没頭している学者が数多くいる。そのような地味で、コツコツと小さなテーマを追っかけている学者たちの研究は、どう説明したらよいのだろうか。彼らには十分な研究費が保障されているのでもないし、教育用の研究以外はしない主義の学者と同じ額の研究費しか与えられていないはずである。そこで必要になるのが、昔からよくいわれるように、趣味、道楽としての学問、いわば「遊び」としての学問の説明である。真に深い専門化された研究、真に学界をゆるがすほどの新説を作ることのできる学問は、この「遊び」としての学問から生まれてくる。このことも前述の研究費から説明できる。少ない研究費で自腹を切って資料を集め、実験したりする根気は、学問を「遊び」と思える人の心の中に湧いてくる。「自らの研究」を、「遊び」の論理で説明し、自らを納得させるというやり方は、古めかしいこと

かも知れないが、この古い考え方が今日でも生きているのである。

この夏休みもまたRIHEに出向かねばならない。学問と「遊び」、*「教育のための研究」*、大学の教育方法はいかに、etc. いろいろ雑考していると、他の研究員たちの顔々が浮んでくる。

〔教育学部教授・広大RIHE客員研究員(併任)〕

ブラウジングコーナー

落書きの効用

落書きの場所は以前は便所と相場がきまっていたが今日ではいたるところでみうけられるようになり時代の移り変わりを思わせる。しかし多いのはやはりトイレであろう。

落書きといえば永遠のテーマである男女の関係、すなわち恋愛問題が多いようだが昨今はそれに加えて人生訓、反戦、学生運動、政治・社会風刺など多岐にわたっており、ユーモアやウィットにとんだものもある。さすがに社会が不安定で住みにくくなると社会風刺や政治風刺がめだつ。

曰く、

やせたソクラテスより
ふとったブタであれ!

——田中角栄——

というのがあり、びろうな話したが病気を苦しにしたものに、

9月27日 出血す
サーカネッテンの効果期待出来ず
さりとて
切断の決心未だ出来ず
「ち」よ
クソとともに僕のコーモンから去れ! と
更に続けて
あゝ出血が止まらない
ちの苦しみをみんなでわかちあおう。

——痔民党——

またトイレそのものについては

トイレは思考(シッコ)と
空想(クソ)をするところである。

——マルクソ——

落書きは社会への不平不満や、かなわぬことを落書きに託して青春のはげ口をもとめているので、あながち否定するものどうかと思う。したがってTPOだけをわきまえば多少は許るされてもよいのではないだろうか。

(閲覧係 H.A.)

津田梅子から E. R. Bull への手紙

伊 佐 眞 一

こゝに一通の手紙がある。1918（大正7）年4月20日付となったこの手紙の発信者は津田梅子、受け取り主は鹿児島在住の Earl R. Bull という外国人宣教師。思いがけないことから手にしたこの手紙を紹介する前に津田梅子という女性について、多少その略伝を述べてみたい。

何事によらずものごとは初めがむずかしい。たゞ単に先駆者に必要欠くべからざるものは、その熱情と能力だけでは足りず、それらを根底で支え、かつ突き動かしめる時代の成熟がなければならず、それ故すべてパイオニアは時代の精神をより強く反映した鏡と言えるものである。

津田梅子（1864-1929）——その名前は我が国最初の女子留学生、及び我が国屈指の女子高等教育機関の創立者としての名誉と結びついている。この明治、大正を生き抜いたひとりの女性の生涯を追う時、一種名状しがたい感慨にとらわれてしまうのは、彼女が多感な思春期の大部分を外国で過ごしたにもかゝらず、その生涯を通じて終始一貫故国日本に対して強い自己意識を持ち続けたことにある。

彼女は明治維新を数年後にひかえた1864年、農業界の大立て者と言われた津田仙（1837-1908）の次女に生まれた。そして、わずか八才の時、明治政府による欧米列強との不平等条約改正を目指す政策に相乗りしたかたちで、岩倉具視を全権大使とする使節団と共に渡米、当時日本公使館付書記官をしていた Charles Lanman にひきとられた。子供のなかった夫妻のもとで以後十一年間、普通の教科に加えて心理学、天文学、フランス語、ラテン語、ピアノ等を学び、その間1873年の夏にはキリスト教の洗礼を受けた。詩人 H. W. Longfellow の書簡の中で彼女のことがしるされるのもこの頃のことである。そして、日本では国会開設の詔勅が發布された翌年の1882（明治15）年、「仕事が自分を待っている」と踏みしめた日本の言葉は全く忘れ去られ、自らの良き理解者と頼んだはずの父も所詮は自由闊達な空気を吸い込んできた彼女にとって、畢竟封建的専制家長であった。1885（明治18）年、創立したばかりの華族女学校に伊藤博文の推薦で奉職したものの、彼女の内面の渇きは依然として癒されず、日々いよいよ焦躁を増すばかりであった。この時は今だ漠然とした憤懣の域を出なかったものが明瞭な自己目標となってあらわれたのは、数年後の Bryn Mawr College への再留学であり、日本女性に高等教育を与えることを使命と感じたのであった。1900（明治33）年、彼女が私立女子英学塾を麴町一番町に開くに至らしめた理念を得たとも言うべき転機がこれである。貧弱な設備の中で、わずか十名の入学者を加えた十数名で始めた女子英学塾も、「教師の資格と熱心とそれに学生の研究心」さえあるならば、「真の教育は出来るもの」との決意の前には一般世間の批評も問題ではなかった。

文部省の良妻賢母主義、「女大学」的奴隷道徳、及び無気力な忍従主義を排し、女性の経済的安定となるための職業教育を正面からの旗じるしとした彼女の教育方針は、キリスト教に基づいた自主的で、積極的な女性像を目指したものであるが、反面明治という時代と彼女個人の資質は、社会の中における女性の地位向上を求めて政治がらみとなるまでには至らなかった。1914（大正3）年4月に開かれた第二回英語教員大会の演説で彼女は次のように述べている。「女も単に matron たるに止まらないで進んで the trainer of the mind とならなばならぬとて、私は女子が男子と equal rights を得なければならぬなど、要求する者では有りませぬが、女子は単に girls をのみ教ゆるに止まらず中学校下級の boys をも教ゆるに適する事を信じて居ます、女子は少なくとも patience を持って居る点で better qualified である、——（中略）——四十人五十人と云ふ crowded classes は教授上の進歩阻害する事甚だしい、最も効果ある教授をなすには一組十五人が適当で廿人になれば既に多過ぎ

ます、財政上許しませぬなら女子の英語教師を hire する事にすればよろしい、女子ならば月給が少なくても満足しませう」。その意味では明治の後年女子英学塾に学んだ経験をもつ平塚らいてうや山川菊栄らのその後の活動とは一線を画するものであったと言えるし、又日清、日露の両戦役、そして自由民権運動や社会主義運動からも超然とした態度であった。現に津田の言動には上記の二名やそれらの運動とストレートに結びつくものは見あたらないのである。1915（大正4）年、大正天皇即位の大典に際し、女子教育に尽くした功により勲六等宝冠章、その翌年には帝国教育会から教育功勞の表彰を受けるなど、これらの事実も津田の女性運動の特質をよく示している。

塾の内外における東奔西走の精力的な活動の間にも、持病のようになりつゝあった喘息、糖尿病により入院の止むなきに至ったのが1917（大正6）年。仕事を唯一の生きがいとした彼女の苦悶は病床にあっても安まることがなかった。その頃の気持ちは、次の文章によく示されている。“Life is worthless without work, and work now must be limited. I have done so little compared to what I wanted to do and it is bitter to stop now. I wonder if it means that.” この年には親友の Alice M. Bacon がアメリカで亡くなるというショックも重なり、一層の神経衰弱になるという状態であった。

こゝで紹介する手紙というのはこのような肉体的、心理的状态にあった津田梅子自筆の短いそれである。行間からも焦るような心の揺れと多少の自虐をこめた調子が伝わってくるだろうと思う。

16 Goban Cho, Tokyo

April 20, 1918

Rev. E. R. Bull

Dear Sir:

Your favor of April 14th is at hand. I send a photograph which is not very good being dim, but it is the best I have. I also enclose a reprint of an article in the outlook which gives the main falls of my life.

I was baptized as a child, July 12, 1873, being only 8 years old, by the Rev. O. Perinchief, a friend of my American guardian, Mr. Charles Lanman. I joined the Episcopal Church then, and was confirmed by the Bishop of Maryland in 1881.

Excuse this brief letter. I have been ill for a year, and have not yet resumed work.

With best wishes for your success in your great undertaking,

I am,

Yours Sincerely,

Ume Tsuda

You need not return the photograph. I am glad to give it.

手紙の中に出てくる写真などは散逸したらしく見つからないのは残念至極だが、とりわけ reprint には興味をそゝられる。しかし、彼女はこのような中にあってもこの手紙を出す直前、“English Stories Adapted for Students of English by Ume Tsuda”を刊行するが、この一事を見ても女子教育にかけた熱意とリーダーとしての矜持の一端がうかがえると思う。ちなみに彼女の手紙はすべて英文で書かれたとのことである。

それにしても、津田のような恵まれた生き方をした女性を考える時、その苦悩にもかゝらず、同じ女性でありながら高等教育はおろか自分の身をもひさぐことによって、人間としての最低限の誇りさえ投げ捨てざるを得なかった東南アジアや中国大陸の無名の「からゆきさん」、それに『沖縄救済論集』の中で、県庁からの訪問客だと聞いて税金が上ったとばかり思い込んだ、借金と税金に追われた、あばら家での陰鬱な生活を過ごしていた同時代の女性たちのことが、絶えず胸中を去来するばかりであった。

16 Lohan Ave. Tokyo
April 20, 1918

Rev. E. H. Bull
Dear Sir; your favor of April 14th is at hand. I send a photograph which is not very good being dim, but it is the best I have. I also enclose a reprint of an article in the Outlook which gives the main facts of my life.

I was baptized as a child, ^(July 2, 1875) being only 8 years old, by the Rev. O. Bonchiff, a friend of my American guardian, Mr. Charles

Fauman - I joined the Episcopal Church then, and was confirmed by the Bishop of Maryland in 1881.

Excuse this brief letter - I have been ill for a year, and have not yet resumed work.

With best wishes for your success in your great undertaking,
I am,
Yours sincerely,
Clara Suda.

You need not return the photograph. I am glad to give it.

津田梅子の手紙

一方、受信者の E. R. Bull という人物にも若干触れなければならないが、当時このメソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church) の宣教師は、1911 (明治44) 年11月オハイオ州から沖縄に布教活動のため渡り、数年の那覇滞在のあと福岡を経て、この手紙を取り交わす鹿児島市池之上町に夫人と共に生活をしていた。沖縄を離れた Bull は、いつの頃からか沖縄についての全般的な研究を始めるようになるが、その後五十年に及ぶ沖縄への強烈な関心の根元が一体何であったのか等々その仕事を再検討 (もっとも Bull についてはこれまで皆無に近いほど何もなされていないのであるが——) してみる心要があろう。1958年に彼が自費出版をした“Okinawa or Ryūkyū: The Floating Dragon”などは百科事典が如き多岐にわたる内容になっている。恐らくこの両者が接触するきっかけは、キリスト教を通じてであろうが、現在のところはっきりしない。尚、この手紙の裏には次のような Bull の津田梅子観が書かれており、簡潔な的を射た批評になっている。“Miss Tsuda is one of the greatest authorities on education for women in Japan, and is the principal of a large

school which draws largely from the upper class of Japanese Society.” 昭和の初年まで年に何度も鹿児島から沖縄へ足を運んで、つぶさに疲弊した農村など沖縄住民の生活を見ていた彼にとって、当然の津田観だったかも知れない。大正の末から昭和にかけての不景気の波は、やがてソテツ地獄を現出せしめたが、沖縄にとっては程度の差こそあれ、それ以前とて塗炭の苦しみに呻吟していたに変わりはないのであり、伊波普猷も1926（大正15）年、Bull宛ての手紙で「琉球は昨今非常に窮境に陥って、国家の手で救済されなければならないやうになってゐますが何だかもう助からないやうな気がします」と言い、その年に刊行された『孤島苦の琉球史』の巻頭にも「私達は歴史によって押しつぶされている」というグルモンの言葉を引用している。まさに当時の沖縄は、Bull が1924（大正13）年に書いた文章の題名、“Neglected Loo Choo” そのまゝの「顧みられない」状態にあったのである。

Bull をして沖縄研究に向かわしめたもの、ひとつに上記のような状況下における、本土との対比の上で、沖縄の特性が彼のなかではっきりと浮き彫りにされたということがあるのではないか。そして、その視点は日本人でもなく、沖縄人でもない第三者の目を通したそれであった。その意味からも津田の手紙が多分に自己告白めいたものであるのに対して、付け加えられた Bull の批評が冷静さをもって感じられることが逆に興味をひくのである。

Bull について調べている途中で見つけたこの手紙は、以上の脈絡の中でよりよく理解されるものであるが、幅広い交友関係をも含めた「Bull 研究」は今後の課題であろう。

（閲覧係）



津田 梅子（晩年）



E. R. Bull（1919年頃）

「沖縄研究史」書誌稿(4)(完)

— 言語・文学・奄美篇 —

新城安善

はじめに

本稿は、前回に続いて〈言語・文学〉及び〈奄美関係〉の領域の研究史を収録したものである。

(1979年12月末現在)

————— * ————— * —————
〈言語篇〉

アクセントから見た琉球方言の系統(平山輝男)

〔方言〕7巻6号(1937)

沖縄方言の言語年代学的研究(服部四郎)

〔民族学研究〕19巻2号(1955)

琉球方言の動向(外間守善)

〔国語学〕41号(1960)

沖縄における英学の伝統(豊田 実)

〔日本英学史の研究〕(豊田 実著)(1963)

沖縄における英学の導入とその変遷について(亀川正東)

〔琉球大学法文学部紀要〕人文篇 12号(1968)

琉球方言研究の現状と将来(平山輝男)

〔国文学 解釈と鑑賞〕34巻7号(1969)

方言研究の文献解題と方言資料の紹介(中本正智)

〔国文学 解釈と鑑賞〕34巻8号(1969)

琉球方言による文学の伝統と形態(外間守善)

〔人類科学〕23号(1971)

座談会 沖縄の言語と文化の源流(霜田正次 新里恵二 外間守善)

〔文化評論〕130号(1972)

「沖縄文化論叢」第5巻 言語編解説(外間守善 中本正智)(1972)平凡社刊

宮古方言の研究とその意味(柴田 武)

〔人類科学〕24号(1972)

座談会 沖縄の方言と沖縄学(上村幸雄 新城敏男 仲程昌徳 中本正智 比嘉実 比屋根照夫 外間守善)

〔言語生活〕251号(1972)

急を要する琉球諸方言の記述的研究(服部四郎)

〔沖縄タイムス〕1973年3月14日→〔月刊言語〕2巻8号(1973)

琉球方言研究の現状と課題(中松竹雄)

〔方言研究年報〕17号(1974)

琉球方言とその研究の意義—琉大方言クラブ創立20周年記念講演要旨—(上村幸雄)

〔沖縄タイムス〕1977年6月11日

琉球語の諸問題—「比較方言学的立場からの考察」—覚書(北條忠雄)

〔秋田大学教育学部研究紀要〕人文科学・社会科学 27集(1977)

琉球方言研究の現代の課題—とくにその比較歴史方言学的研究について(上村幸雄)

〔新沖縄文学〕35号(1977)

〈文学篇〉

おもろ研究前史—田島利三郎先生評伝（金城朝永）

〔南島論叢〕（1937）沖縄日報社刊→〔金城朝永全集〕上巻 言語・文学編（1974）沖縄タイムス社刊
琉球に取材した文学（金城朝永）

〔沖縄文化〕1～13号（1948～1949）→〔沖縄文化叢論〕4巻 文学・芸能編（1972）平凡社刊→〔金城朝永全集〕上巻 言語・文学編（1975）沖縄タイムス社刊

座談会 戦後沖縄文学の反省と課題（太田良博 呉我春男 船越義彰 北村 潤 冬山 晃 数田雨條 大城立裕 嘉陽安男）

〔琉大文学〕7号（1954）

座談会 出発に際して—戦後沖縄文学の諸問題（太田良博 大城立裕 新川 明 池田 和）

〔沖縄文学〕1号（1956）

「**琉球文学**」とともに—将来の琉球文学の研究と方法（当間一郎）

〔沖縄タイムス〕1960年10月19日～21日

「**琉球文学**」の将来—方言研究と正確な音記を（宮良当社）

〔沖縄タイムス〕1960年12月22日

沖縄研究における仲原善忠先生の業績（外間守善）

〔沖縄タイムス〕1965年3月13日

琉球文学の展望（外間守善）

〔文学〕33巻7号（1965）

沖縄文学研究の歴史（比嘉春潮）

〔文学〕33巻7号（1965）

「**おもろさうし**」の諸本と系譜（外間守善）

〔琉球大学文理学部紀要〕人文篇 10号（1966）

座談会 沖縄は文学不毛の地か（池田 和 嘉陽安男 船越義彰 矢野野暮）

〔新沖縄文学〕1号（1966）

おもろさうし研究の思想的系譜（比屋根照夫）

〔沖縄タイムス〕1967年6月26日～7月1日

対談 沖縄の現実と文学（安岡章太郎 大城立裕）

〔新沖縄文学〕9号（1968）

最近の沖縄文学研究（崎原恒新）

〔琉球新報〕1968年10月12日

座談会 沖縄・文学・思想（五木寛之 星雅彦 長堂英吉 牧港篤三）

〔新沖縄文学〕13号（1969）

八重山地方文学史（崎原恒新）

〔琉球新報〕1970年1月20日～2月5日→「八重山の社会と文化」(宮良高弘編)(1973) 木耳社刊

座談会 現代における文学と思想（江藤 淳 米須興文 大城立裕）

〔新沖縄文学〕16号（1970）

沖縄地方文学史（崎原恒新）

〔沖縄タイムス〕1971年1月12日～5月28日

十八世紀における沖縄文学の動向と展開（比嘉 実）

〔文学〕40巻4号（1972）

文学作品における沖縄の言葉—その動向と展開（仲程昌徳）

〔言語生活〕251号（1972）

「**沖縄文化論叢**」4巻 文学・芸能編解説（外間守善）（1972）平凡社刊

- 沖繩研究入門講座 オモロ研究史（池宮正治）
〔沖繩思潮〕1号（1974）
- 沖繩研究入門講座 組踊り研究史（当間一郎）
〔沖繩思潮〕3号（1974）
- 沖繩文学の課題（大城立裕）
〔沖繩思潮〕8号（1975）
- 座談会 「新沖繩文学」十年（大城立裕 米須興文 池田 和 仲宗根 勇 仲程昌徳 岡本恵徳）
〔新沖繩文学〕32号（1976）
- 新おもろ学派のこと（嶋袋全幸）
〔沖繩文化〕46号（1976）
- 討議 沖繩の戦後文学と演劇（米須興文 大城立裕 川満信一 中里友豪 関根賢司 仲井間憲児 新川
明 松田賀孝 岡本恵徳）
〔新沖繩文学〕35号（1977）
- 座談会 続・沖繩文学の課題—「沖繩」の可能性（大城立裕 米須興文 瀬名波栄喜 比嘉長徳 船越義彰
森田孟進 米盛裕二 仲井間憲治）
〔沖繩思潮〕9・10合併号（1977）
- 〈奄美大島篇〉
- 地方別調査研究—奄美群島（山下文武）
〔日本民俗学大系〕11巻（1958）平凡社刊
- 座談会 奄美の文化を語る（大城立裕 源武雄 福地唯方 照屋寛善 宮城鷹夫）
〔新沖繩文学〕11号（1968）
- 奄美—日本列島の見える原点（石田郁夫）
〔中央公論〕85巻7号（1970）
- 奄美研究の動向—回顧と展望（山下欣一）
〔沖繩文化〕33・34号（1971）
- 奄美の歴史と現状（大津幸夫）
〔歴史地理教育〕198号（1972）
- 南日本の文化について—南島文化編年試論（長沢和俊）
〔南日本文化〕5号（1972）
- 南島文化論（長沢和俊）
〔文学〕40巻4号（1972）
- 小さな奄美大島研究史（新屋敷幸繁）
〔琉大史学〕6号（1974）
- 奄美史の時代区分—大山麟五郎氏画期的分析—法政大学沖繩文化研究所例会
〔沖繩タイムス〕1974年5月19日→〔琉大史学〕6号（1974）
- 奄美先史学の当面する諸問題（白木原和美）
〔琉大史学〕6号（1974）
- 奄美における土器文化の編年について（河口貞徳）
〔琉大史学〕6号（1974）
- 「奄美学」シンポジウム
〔琉大史学〕6号（1974）
- 南島の民間説話研究の課題（山下欣一）
- 南島の民間説話研究の歩み（山下欣一）
〔奄美説話の研究〕（山下欣一著）（1979）法政大学出版局刊

（整理係長）

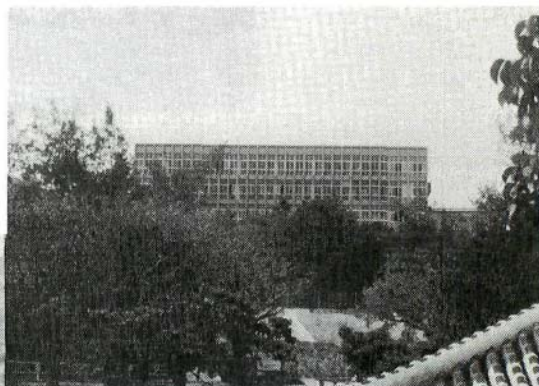
新キャンパスへの移転に思う

千原キャンパスの新図書館はいよいよ6月に完成するという。7-8月に移転することになっているが、25年余住みなれたこの図書館を置き去りにするのは、何ともしのび難い。志喜屋記念図書館の設立には、琉球住民、海外同胞、沖縄在住の米人、琉球政府、米国民政府の協力があつた。設立後は地域住民や他大学の学生にも良く利用され、本土からも沖縄研究者が数多く訪れた。

琉大創立当初の首里キャンパスは、戦禍未だ消えやらず、殺風景であつた。しかし30年余を過ぎた今日、緑したたる樹木が生い茂って、好ましい学園風景をかもし出している。話は古くなるが、図書館の西下側に竜樋があり、その上あたりに図書館の便所がある。「竜樋の上に便所を作るとは何事か！」とユタに大学当局者が叱責されたこともあつたそうだ。又1956(昭和31)年9月3日に図書館4階から火が出て、4、5階を焼失したことがあつたが、巷では、まことしやかに「竜樋の上に図書館を建てた祟り」だと噂されていた。

図書館5階の北側の窓から眺めると眼下に円鑑池と弁財天堂がある。弁財天堂はその昔尚真王代に建てられ、当初は経堂(経蔵)であつたという。言ってみれば経堂は書庫であるから、書庫→文庫→図書館と連ねて考えると、経堂(弁財天堂)は図書館のはしりと言うことができよう。そのように思いめぐらしながら眺めていると、弁財天堂がしたわしく格別美しく映じてくる。円鑑池の景観は、尚真王代から殆んど変わっていないのではなかろうか?、ゆかりのこの地から移転した後のこの図書館は、うたかたの如く消えるのであろうか。長年勤めてきたこのキャンパスから、将来の発展のためとは言え、去り行くことは、やはり淋しい。

(参考調査係長 山田 勉)



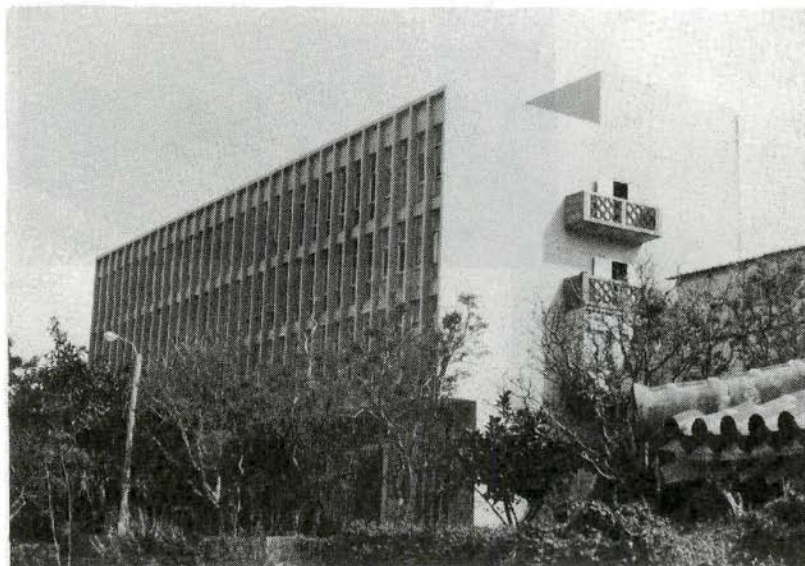
志喜屋記念図書館の位置

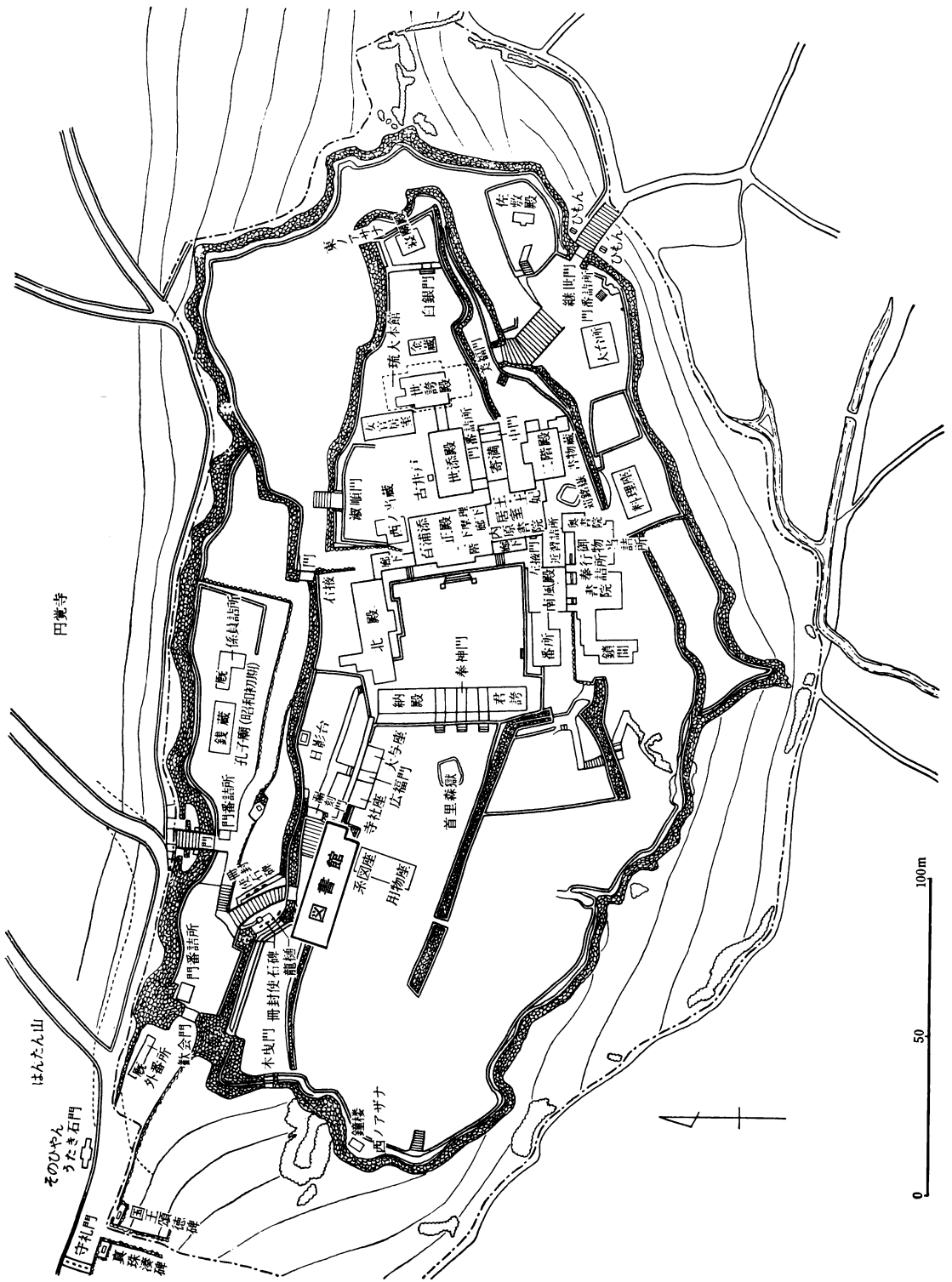
新キャンパスへの移転のため、志喜屋記念図書館を去ることになった。移転後この図書館がどのようなことになるのかまだわかっていない。何れはとりこわされるのであろうが、25年余も実在したこの図書館が消えていくのは淋しい限りである。現在位置は多くの写真や図面で知ることができるが、将来首里城が復元されることになれば、又地形も様相も変わるであろう。その際の参考に志喜屋記念図書館が旧首里城のどの辺にあったかを記しておくのも何かの役に立つかも知れない。

旧首里城要図を次に掲げて図書館の位置を示しておくことにする。この首里グスク要図は「日本城郭大系 1 北海道・沖縄 創史社編 新人物往来社 昭和55年 P289」からとったものである。

(昭和56年 3月31日)

(参考調査係長 山田 勉)





首里グスク要図(『首里城欽会門復元工事報告書』より)

新図書館の工事順調に進む

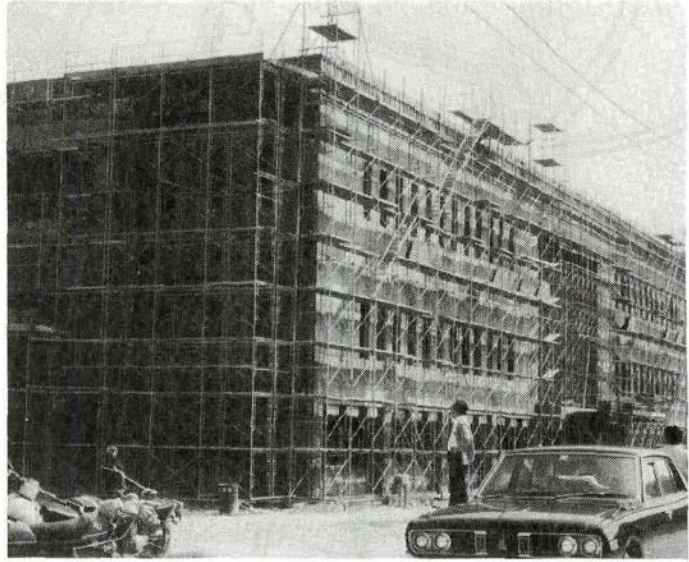
新図書館への移転計画については本誌前号（14巻1号 '81. 2. 10. P.9）ですでお知らせしたとおりだが本体工事も3月中に終り、4月からは内装、外装工事にとりかかっている。

建築課の話によると6月30日までは予定どおり竣工したいとのことであり、目下業者の方でも日夜突貫工事を進めており、図書館でも7月1日の移転開始にそなえてその準備を始めているところである。

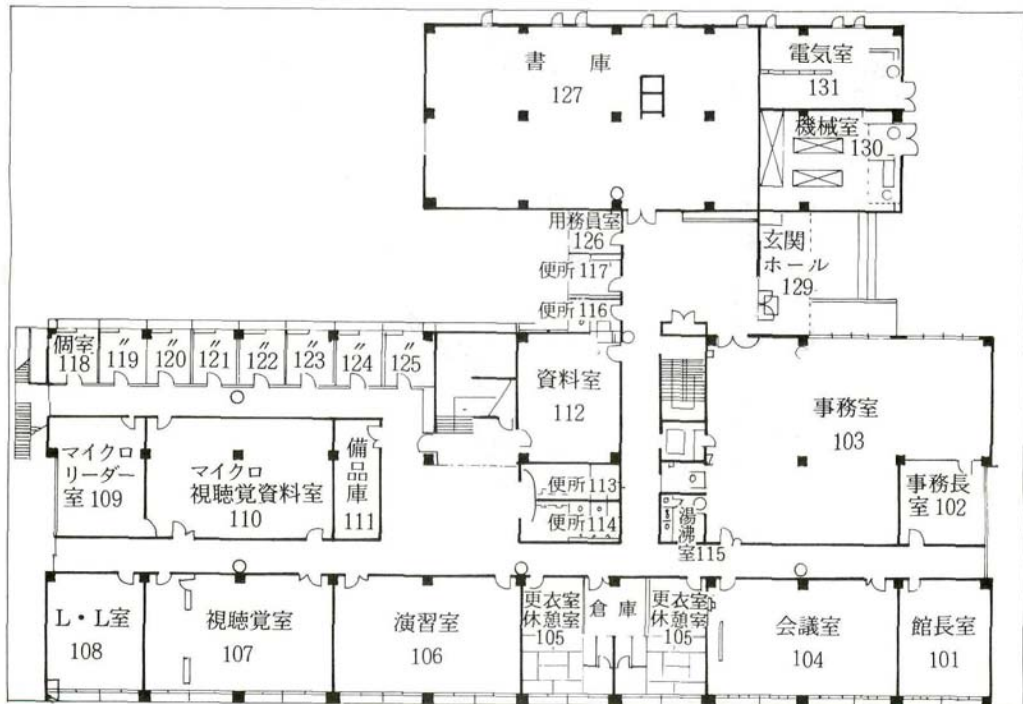
閉館期間中（自昭和56年7月1日至昭和56年8月31日）の利用貸出しについては別項のとおりだが授業期間中の6月30日までは平常どおり開館する。

新図書館の総面積については前号でお知らせしたとおりだが各階の概要図は次のとおりである。

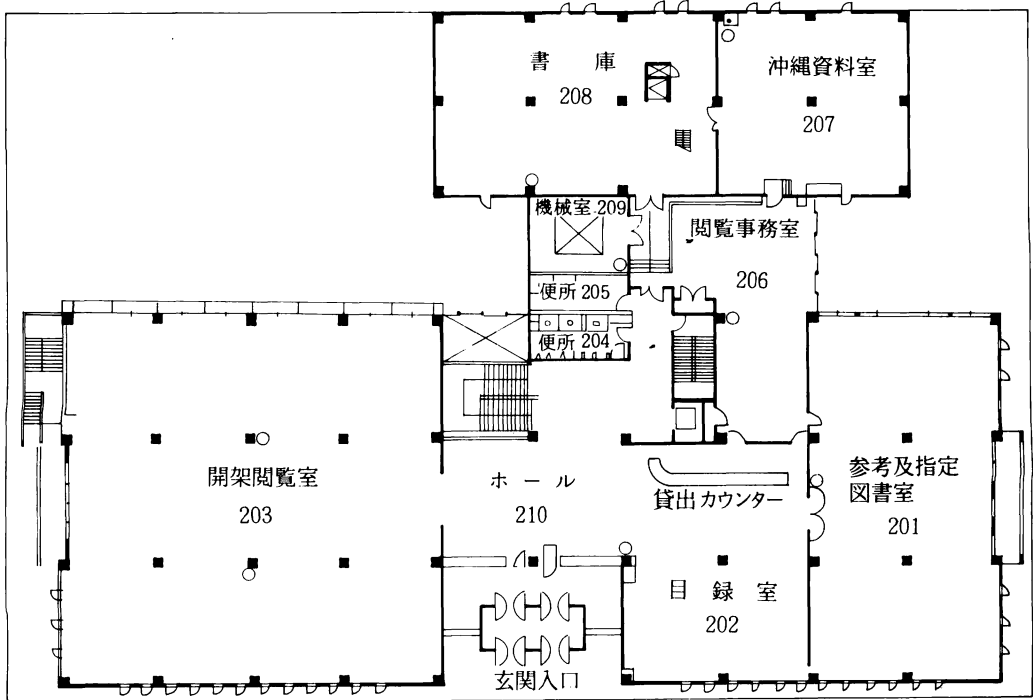
（図書館）



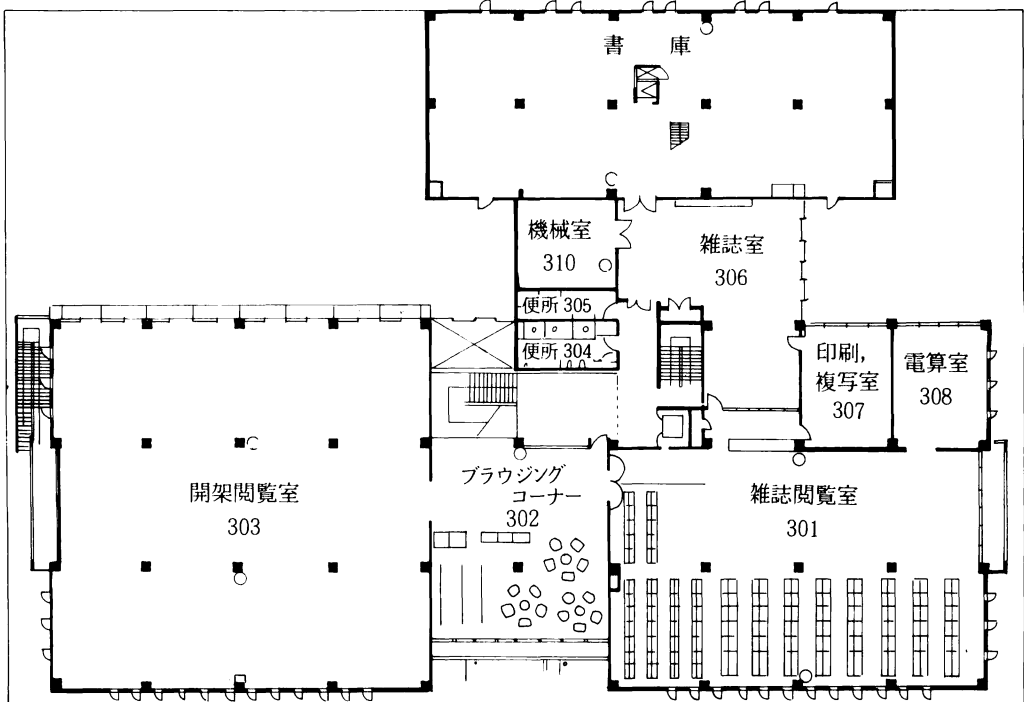
1階 管理棟



2階 サービス棟



3階 サービス棟



移転(閉館)期間中の図書館業務について

移転については先に”びふりお”14巻1号(’81, 2, 10)でお知らせしたとおりだがその期間中(自昭和56年7月1日至昭和56年8月31日)における図書館業務については次のように実施しますので御注意下さい。

記

○他館利用及び複写

他館利用証明書の発行及び複写業務は6月30日までとし、移転期間(昭和56年7月1日～8月31日)は中止します。(総務係 内線335)

○図書購入業務

図書資料の購入業務は昭和56年7月1日～8月31日まで中止致します。購入希望申込票(三枚一組のスリップ)の受付は6月30日で終了、受付開始は9月1日となります。(受入係 内線333)

○雑誌の利用

移転期間中の新着雑誌利用については雑誌係へ御相談下さい。またバックナンバーについては利用できませんので6月末までに必要部分を複写するか、長期貸出(教官、大学院生のみ)の手続きをとって下さい。(雑誌係 内線336)

○図書の利用

教職員へ

移転中は閲覧業務を行なわないので必要資料は6月27日(土)までに貸出手続きをおとり下さい。また返本は昭和56年9月7日(月)以降9月12日(土)までにして下さい。

医学部図書室、農工理図書室は従来どおりで、閉室はしない。

学生へ

移転中はすべての閲覧、貸出、返却業務を中止する。

- 1 長期貸出手続期間：自昭和56年6月22日(月)至6月27日(土)まで。
- 2 長期貸出期間：自昭和56年6月22日(月)至9月7日(月)まで。
- 3 貸出冊数：和書5冊、洋書5冊、アメリカ研究図書3冊、指定図書3冊計16冊以内。
- 4 返却期間：昭和56年9月7日(月)以降12日(土)まで。(閲覧係 内線334)

○文献複写、情報検索等

他大学への文献複写申込、情報検索(J O I S)、相互貸借及びその他の参考業務は7月1日から8月31日まで中止します。(参考調査係 内線338)

新 着 図 書

わたしの知的生産の技術 知的生産 技術研究会 講談社 1980	002-C49	て宗教は可能かー O. M. マツ カイ著 池田光男 有賀寿記 すぐ書房 1978
出版界の現実 朝日新聞社芸部 日本ジャーナリスト専門学院出版 部 1979	023.1-A82	人類の目標 アーヴィン・ラズロー 209.7-L33 他編 大来佐武郎監訳 ダイヤモン ンド社 1980
孤独よ、さようならー母親からの脱 却ー 国谷誠朗 集英社 1978	149-Ku46	スペインの新大陸征服 ルイス・ハ ンケ著 染田秀藤訳 平凡社 1979
科学的自然像と人間観ー現代におい	160.4-Ma21	

- ラテンアメリカ見聞録－特派員の目 296.95-Ke24
・中南米編－ 菊地育三 朝日ソ
ノラマ 1977
- ドミノ理論の行方－アジア七つの旅 310.4-N92
より－野田卯－ 卯の花会出版部
1976
- 政治学への道案内 高島通敏 三一 311-Ta28
書房 1980
- 政治学－大学基礎講座－ 片岡寛光 311-Ka83
編 成文堂 1980
- 東南アジア－戦後世界史の焦点－ 312.33-Sa25
斉藤吉史 朝日新聞社 1975
- 日本と韓国 八木信雄 日韓文化協 319.121-Y 15
会 1978
- 日華・風雲の七十年－張群外交秘録 319.122-C 52
－ 張群著 古屋奎二訳 サンケ
イ出版 1980
- 70年代アジア国際関係 今川英一編 319.2-I 42
アジア経済研究所 1980
- 中ソ対立と現代－戦後アジアの再考 319.2238-N 34
察 中嶋嶺雄 中央公論社 1978
- イスラム法への招待－イスラム法講 322.28-I 85
演会（東京）記録 日本比較法研
究所 1978
- 荒れる法廷 上, 下 ドーセン, フ 327.953-D 87
リードマン著 大坪憲三訳 サイ
マル出版会 1978
- 経営学ガイドブック 南山大学経済 R 335-N 48
経営学会 白桃書房 1979
- 日本的経営の編成原理 岩田竜子 335.021-I 97
文真堂 1977
- ソ連とロシア人－この恐るべき発想 361.4-Ki39
と行動の読み方－ 木村汎 蒼洋
社 1980
- アラブ諸国のマンパワー アムル・ 366.2-Mo17
モヘッディーン, イリヤ・F. ハ
ーリック著 堀侑他訳 アジア経済
研究所 1980
- 結婚－婚期をひかえた娘のために－ 367.4-D 95
P. デュフオワイエ著 小林珍雄
訳 中央出版社 1978
- 人間の教育 J. S. プルナー著 370.4-B 78
佐藤三郎訳編 誠信書房 1975
- イギリスの教育 シックス・フォー 372.33-I 32
ム・カレッジの創立 池田良三
ぎょうせい 1980
- 書きはじめの文字指導 関岡猪蔵 375.8-Se38
ひかりのくに 1974
- ニッポンの大学生－師弟対談・知的 377.9-R 62
学生生活の方法 ヨゼフ・ロゲン
ドルフ 主婦の友社 1979
- 心身障害幼児の養育技術 大川原潔, 378.6-O 46
寺山久美子 岩崎学術出版社
1979
- 性と迷信－韓国の奇俗 季圭泰 東 382.21-R 32
洋図書出版 1978
- 一般相対性理論 ディラック著 江 421.2-D 78
沢洋訳 東京図書 1977
- 星と宇宙の謎 前川光 公論社 440.1-M a27
1978
- 月面フォトアトラス 高橋実 誠文 446.4-Ta33
堂新光社 1978
- 自然と人間－社会のなかの生態学 468-S h23
渋谷寿夫 法律文化社 1978
- 動物子育て物語－親と子のきずな－ 480.4-N 32
中川志郎 佼成出版社 1978
- 生命の誕生－昆虫・小動物の世界－ 481.4-S a75
佐々木崑 家の光協会 1978
- 動物子別れ物語－ひとりだちへの道 481.7-O 27
－ 小原秀雄, 動物の科学研究会
著 佼成出版社 1978
- 生体とME－基礎から計測制御まで 492.8-S a32
－ 阪本捷房, 斉藤正男編 東京
電機大学出版局 1980
- 間違っているメガネのかけ方選び方 496.132-N 41
中尾圭一 日本書籍 1979
- 幼稚園の基本設計 河野通祐 井上 526.3-K o76
書院 1978
- サンリオの奇跡－世界制覇を夢見る 589.7-V 41
男達－ 上前淳一郎 P H P 研究
所 1979
- アジアの食糧生産－開発と需給－ 611.3-K a96
川野重任編 アジア経済研究所
1980
- 熱帯の野菜 農林水産省熱帯農業研 626-N 96
究センター 1980

音楽への言葉 グルダ著 前田和子 訳 音楽の友社 1976	760.4-G92	生涯体育の科学 鎌田章ほか著 遊 戯社 1979	784.6-Ka31
音楽の物理学—音楽をする人たちの ための入門書— アレクサンダー ・ウッド著 J. M. パウシャー 改訂 石井信生訳 音楽の友社 1976	761.12-W86	中国語基礎講座課本—改訂北京放送 テキスト— 光生館 昭和51	820.7-C46
監督の条件—その実戦と理論— 梅 村清弘等編著 大修館書店 1974	780.7-U41	白水社中国語教科書—会話篇上, 下 — 長谷川寛, 金丸邦三 白水社 1980	820.7-H36
体育スポーツの哲学 E. F. ジー グラー著 阿部忍ほか訳 不味堂 出版 1979	781-Z2	現代中国語文法 香坂順一 光生館 1979	820.7-Ku32
陸上競技トレーナー用教科書 L. S. ホメンコフ編 小野耕三訳 ベースボール・マガジン社 1978	782-Kh	中国語学習のポイント 望月八十吉 高維先共著 光生館 1979	820.7-Md2
		新しい中国語会話 香坂順一 光生 館 1979	827-Ko82
		ドイツ語12課 G. ツオーベル, 子安 美知子編 白水社 1976	840.7-Z5

図書館事情

〔来訪者〕

- 1月28日(水) 国文学研究資料館 研究情報部長 古川清彦教授
 1月29日(木) 最高裁判所図書館副館長 坂井久雄氏
 1月30日(金) 宮城教育大学図書館事務長 斉藤秋雄氏
 2月24日(火) 東京外国語大学附属図書館整理係長 佐藤剛氏

〔講習会〕

J O I S 講習会 1月26日(月)～29日(木)於博多駅前朝日ビル 山田勉参考調査係長参加

〔学内人事異動〕 4月1日付

- 附属図書館総務係長 玉那覇文彦は附属病院給食係長へ
 附属図書館受入係 上里政秀は短大部会計係へ
 附属図書館総務係 安次嶺美智子は医学部事務部へ
 附属熱帯農学研究施設事務係長 友利彦一は附属図書館総務係長へ
 経理課給与係 大城弘安は附属図書館受入係へ
 短大部会計係 本村 久は附属図書館総務係へ

〔出張〕

- 2月12日(木) 平良恵仁事務長, 全国国立大学図書館協議会総会打合のため東京大学附属図書館へ
 13日まで
 2月19日(木) 平良恵仁事務長及び宮島恵眩雑誌係長, 実務担当者連絡会議出席のため九大附属図
 書館へ21日まで
 新城安善整理係長, 移転業務調査のため福島大学附属図書館へ21日まで

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第14巻 第2号〔通巻第50号〕
 昭和56年4月30日 発行人 平良恵仁 沖縄県那覇市当蔵町3丁目1番地
 電話 87-0101 (内線338)